

シェフィールド大学と大田直子さん

鈴木慎一

(早稲田大学名誉教授)

『大田直子さんを偲ぶ会』当日、私は足を踏み外し、アキレス腱を傷めた。歩くことが難しくなり、弔電を打った。その文面を作りながら、昨年の年次大会で術後の大田さんに会った教室の有様を思い浮かべていた。

名古屋の会合の後、再発したが検査結果がよいという知らせを貰って安堵していただけに、訃報はなかなか胸に落ち着かず、宙に浮いていた。その気持ちのまま電文を綴って、送信を依頼して、はじめて「訃報」が気持ちの中に沈んだ。

「イギリス教育研究会」は、家永訴訟のおりに家永側証人として法廷にたった大田堯さんの「イギリス教育課程行政」に関する証言内容を事実に基づく発言内容にするため、故人となられた成田克矢さんからの呼びかけで始められた勉強会である。大田、成田、私の三人で始まり、時折、堀尾輝久さんや平原好春さんが顔を見せる小さなものである。1972年ごろのことだったと思う。最初は東京大学の大田研究室で会合をもったが、いくつか事情があったらしく、やがて早稲田大学大隈会館の一室を使うようになった。勉強の主な目的には、文部省側証人があらかじめ法廷に提出していた発言内容（証拠書類）を厳密に吟味することも含まれていた。神田修さんが参加するようになったのもどちらかという早い時期である。

このような動きには、それに先立つ二の事情があった。それは、日本教育学会が当時エセックス大学からケンブリッジ大学へヒューズホール館長として赴任したリチャード・ディース (Richard D'Aeth) 氏を招聘したことである。ディースさんはイングランドの試験制度や教育制度全般についてさまざまな機会に語った。成田さんがそのような会合の折に座長を務めた。私は、日本教育学会の事務局から依頼されて、ディースさんを一日鎌倉に案内した。そのようなことが、私が上記勉強会にかかわることの背景だったかもしれない。

勉強会にはイギリスから帰国した方達が招かれたりするようになったが、その頃は訴訟の方も進み、特に勉強会を密かに開く必要もなくなっていた。定かな記憶がないが、そのころの「イギリス教育研究会」について、日本教育学会紀要に会員動向として私が書いたことがある。いま時期は明確に思い出せないが、ある日、大田直子さんが私の研究室にこられた。どのような話をしたのか。

この小さな研究会に故人となられた鈴木英一さん（当時、名古屋大学）がお見えになるようになって、鈴木さんの院生達も新しいイギリスの動向について話題を提供して下さるような時期があり、その後、鈴木英一さんが名古屋大学で開催した日本教育学会の一夕、イギリス教育研究者の集いの場を設けてくださった。その席で、大田堯さんが自分のイギリスとの出会いや関わりを語り、イギリス教育の研究に携わる人たちへの要望を述べられた。成田さんは他界していて、会合を主催していた私が、その要望にこたえるような緩やかなイギリス教育研究者のネットワークを作ろうと呼びかけて、それに答えてくれたほとんどすべての方の参加をまつネットワーク作りが始まった。大田直子さんはこの会合に出ておられて、ネットワーク作りの手伝いを申し出てくださいました。会合の席上、主な大学でイギリス教育研究に携わっておられた方々にネットワークの世話役をお願いしたのではなかったかと思う。

旧イギリス教育研究会の事務方を引き受けていた私は、事柄の成り行き上、ネットワークを主催することになったが、私は各地域にコロニーのようなイギリス教育研究者の単位ができあがり、その単位を緩やかにつなぐことを念頭においていた。東京には「現代イギリス教育研究会」というもうひとつの研究グループがあって、当時 British Council Tokyo が編集した、イギリス関係の諸グループを総括してディレクトリーにその名があったから、当然、各地にさまざまなイギリス教育関係の研究グループがあるだろうと予想していたからである。私が知っていただけでも、東北大学、京都大学、九州大学には、イギリス教育の研究者が大学院で演習指導を行っていた。然し、当初、フォーラムの姿は「イギリス教育研究会」のあり方とはあまり変わっていなかったと記憶している。実際に動き出した「日英教育研究フォーラム」も個人のネットワークであった。それはそれで実情に即したことであったかと思う。

大田直子さんを事務局長にお迎えして、フォーラムのあり方が一変した。それは、イギリス教育の研究に向かう人々の方法論的スタンスを再検討する試みとしてフォーラムを組織立てるという趣旨のもので、意欲にあふれたものであった。それまで早稲田大学に会場を求めてきた方式も改めて、中央大学の施設（御茶ノ水）を用いるというように、新しい組織に新しい命とリズムを与えようとする積極性に富む方針であった。第一回のフォーラムが、イギリス教育史研究の方法、方向性、課題を中核とする内容を整えたことは、大田直子さんのその意欲的な取り組みの結果であった。私は、個人的にはそれまでの私の仕事への学術的な一つの挑戦としてその企画を受け入れ、また、緊張したことを覚えている。思い起こすと、それは「近代」批判と教条的マルクス主義批判を基底にした「学識」批判に向かおうとするもので、イギリス教育の党派性吟味を媒介としながら、日本の共産党、社会党の政党イデオロギーと教育学の関連を批判する意味も備えていた。

その後、大田さんと私は British Council の Maurice Jenkins さんと種々意見交換をしながら、イギリスからの訪問者をフォーラムに招いた。それは年次大会に限らず、通年数回に及ぶもので、私達からの要望もあれば、カウンシルからの要請でもあるという人選であった。そのつど、訪問者の発言がニューズレターや Occasional Paper、あるいは紀要として残されたのは、偏に大田さんの努力の賜物である。大田さんは一人で印刷もなされた。

1988 年教育改革法が施行されて間もなく 4 年になろうとするころ、私は British Council の計らいで、その実態を調査に出かけたことがあった。冬、雪のヨークシャーを訪ね、ロンドンのあちこちへ足を運び、機会を得てエディンバラに旧友を見舞った。その旅程の一つにシェフィールド大学があり、炭鉱の町として栄え、衰えたその町を訪ねてポップルトン教授その他のかたがたに教育改革について尋ねた。

会合の後、Peter Gilroy さんが町を案内してくれた。町並みを見ながら、大田さんがこの町で学んだころ、どのような日々を送ったのだろうかと思ひ出し、足を止めた。1970 年代始めころ、ロンドン大学で過ごした毎日は、私にとっては「希望」や「落胆」や「失意」が交々に去来する日々であったことを多少苦々しく思ひ出しながら、私の知らない大田さんを私は想像していた。

その後、イギリスのサッチャー・ベーカー教育改革がどう進んだかは、いまは誰に日にも明らかになっている。しかし、私は「大論争」(Great Debate) が労働党政権時に政治的に始められたことと、保守政権による教育改革との間にある持続性がどこを基盤にして保持されているのかを知りたいと思った。M. Jenkins さんに相談して、大田直子さんにも助成してもらえるようにしながら、調査旅程を固めた。このときは、その前年にスコットランド教育局から 2 名の官僚をフォーラムに迎えて談論しており、また、イングランドの教育関係政務次官にあたる方が東京を訪問した折りに、対話する機会を得ていたので、英国の官僚たちに合わせてもらえるように Jenkins さんをお願いをした。私は、イギリスの教育政策にかかわる公務員、官僚層の意識を確かめる必要があると思ったからである。

この旅で、私は大田直子さんの直感と実力をさまざまな場面で見たと思っている。一つは、大田さんがイギリス人の生活にしっかりと足をつけて研究調査をそれまでしてきたことが色々な機会に自然ににじみ出たこと。もう一つは、ロンドンの二人の官僚とのやり取りで、その対話は興味深いものであった。私達が教育政策の一貫性を保つ担い手であり、また、努力しているという自負心にみちた言葉が、政策に関する私や大田さんの質問に答える傍ら、彼らの姿勢から伝わってきたのである。それを可能にした対話力は、大田さんの英語に負うことが大きかった。イギリスには成文憲法がない。政権交代による政府は、先立つ政権の政策を 180 度転換することができる。それが慣習法である。そのような政治的構図のなかで官僚が果たす役割は決して小さくなく、また、非力でもない。そのようなことをそこで学び取った。

調査の最終地、エディンバラからの帰途、フライイングスコッツマンの食堂で、一通りの調査を終えて肩の荷が軽くなった大田さんと私は、シェリーとスコッチウイスキーを味わった。大田さんはよい飲み手でもあって、イギリス教育を学問とすることについて語って倦むことがなかった。

大田さんが事務局長を務めて何年目のことであったか、Jenkins さんと相談して、若手研究者を対象とする scholarship をフォーラムが出すようにする企画を立てられた。ご自分のイギリスでの滞在経験や、フォーラムを一層活性化させる施策として着想されたのかもしれない。また、人とのつながりが若手の研究者にとって将来どれほど大事なものになるかを知る大田さんの知恵で

あったとも思う。British Councilからの助成金は円にして30万円程度が見込まれていた。

正式にこのscholarshipが導入されて、数名の人たちがイギリスへ渡った。音信不通になっている人もおり、この種の制度の運営のシンドさが胸中澱のように沈むが、British CouncilはJenkinsさんの退職後、この資金援助を断ってきた。私は何度かカウンシルの副所長格の方と話し合いをしたが、カウンシル自体の財政規模が縮小していて、趣旨は理解できるが現実的に対応できないということで、妥協点がなかった。

私は、せめて3年間この制度を支えたいと思い寄付を申し出たが、私自身が病を得て、支援することができなくなり、大田さんに苦勞をかけることになって、現在に至っている。私としては、私自身の健康に見通しが立てば、改めて大田さんの意思に応えたい。

—昨年であったか、あるいは更にもう一年前であったか、ブリストル大学のクロスリー教授を招いてもらい、久方ぶりに私も大会に出た。そのときに大田直子さんは、年齢から見て残る年月のうちに、せめて二つの仕事を仕上げたいと指折り数えておっしゃっておられた。それが何かは判らないが、意欲的に生きようとしている姿と面差しを目にして、私は励まされた。頸椎狭窄という疾患は、病人当人に予期できない身体の機能失調と意識障害をもたらすので、私は勢い守勢になっていた。

久しぶりに会えて嬉しいという率直な大田さんの言葉を貰って、私は自分なりの歩み方を改めて組み立てなおそうとその時思った。遅れているいくつかの仕事に終止符を打つ作業を改めて始めていたので、そのことを機会があれば伝えたいと思っていた。その手筈の一つとして、完成間近な草稿を見てもらえないかというメールを送ったのに対して、返事がなく、「オヤ？」と思っていたときに、訃報を聞いたのである。

大田さんはきちんとご返事を下さる方だったから、“無言”は常ではないことを私に暗示していたが、その直前のメールで医師の診断が“好い”方向であることを知らせていただいていたから、多忙なのだろうと考えていた。訃報を受けて言葉がなかった。今にして思えば、「せめて二つの仕事」という言葉に沿って、もう少し尋ねておかなければならなかった。

たくさん仕事をした大田さん。私は多くの学恩を受けた。大田さんにし残した仕事があればよいと願う。大田さんの厚意と忍耐と寛容に応えるには、私にはそれぞれの仕事を進めて、実を結ばせて、大田さんに答えるしか術がない。然し、「言葉」「笑顔」、ゆったりとした歩み方、カラフルな装い、それらが私の仕事の実りに木魂のように返ってくることがない。寂しさの極みである。